

故郷より

をさなき頃都にいで、一たびもかへりたる事なき
故郷にしばしたちかへりて、今日は父の墓に詣で候。
年頃心には思ひつつも、得果さざりし御寺詣での宿
願なりて、嬉しさ此上もなく候。さりながら苔むす
石の面を拝し候ては、さすがにさびしう悲しく覚え
申候。紫苑水引などささげてぬかづくほど、法の師
の君はいと貴き読経なしたまふ。やがてその本堂へ
かへりたまひし後も、我は墓前にただ独り残り申候。
何といふ鳥にか一声高く梢になきて、なきしづまり
たるが、一層のさびしさを加へ候。父君よと、おぼ
えず口よりもらし候。心の中には猶いひつづけ候。
父君よ、君が子、今しもここに侍り。まぼろしの御
姿だに見たてまつらばや。かすかなる御声、一言だ
にききたてまつらばや。あはれ父君、みたまましま
さば、この世に生き残りて、幸なき身の悲しきすく
世、人にはいふまじきをも告げまつらむ。と、その
事かの事おもひつづけ候折、大地俄にゆらゆらとゆ
らめく心地いたし候。その時の思ひ、何ともまをし

がたく候。かかる事かきつづらむも、人は心狂ひた
る業とやまをさむ。さらばこれにて筆おきまをし候。
かしこ。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社

平成二十一（2009）年十月十五日発行

初出：「心の華」第九卷第九号

明治三十八（1905）年九月一日発行

筆名：橘糸重子

入力：小林 徹

公開：令和四（2022）年十月一日

橘糸重 [【散文作品集】](#) に戻る。